

PROGRAM

ロベルト・シューマン：

《ミルテの花》より「献呈」 Op.25-1

アダージョとアレグロ Op.70

おとぎの絵本 Op.113

- I. Nicht schnell
- II. Lebhaft
- III. Rasch
- IV. Langsam,
mit melancholischem Ausdruck

—— 休憩 ——

フランツ・シューベルト：

アヴェ・マリア D839

すみれ D786

アルペジオーネ・ソナタ イ短調 D821

- I. Allegro moderato
- II. Adagio
- III. Allegretto

PROGRAM NOTES

音楽ジャーナリスト：山崎浩太郎

本日の曲目は、19世紀のドイツ・ロマン派を代表する作曲家、ロベルト・シューマン(1810～1856)とフランツ・シューベルト(1797～1828)の作品でまとめられている。歌詞がないからこそいっそう明らかになる、歌曲のメロディそのものがもつ美しさと表情の豊かさを、室内楽の名曲とともにお楽しみいただきたい。

シューマン：

《ミルテの花》より「献呈」 Op.25-1

1840年に恋人のピアニスト、クララ・ヴィークとようやく結婚できることになったシューマンは、喜びをかみしめるように、140曲以上の歌曲を1年のうちに書きあげた。25曲からなる歌曲集《ミルテの花》は、クララへの結婚プレゼントとして書かれたもので、フリードリヒ・リュッケルトの詩による「献呈」はその第1曲。「君は僕の魂、君は僕の生命、喜び、悲しみ」と始まる、恋人に捧げる熱烈な愛の歌である。なお後奏で、シューベルトの歌曲「アヴェ・マリア」の一節が引用される。

シューマン：

アダージョとアレグロ Op.70

オリジナルはホルンとピアノのために書かれた作品で、ここではヴィオラとピアノにより演奏される(シューマン自身がホルンをヴァイオリンやチェロに書きかえたヴァージョンもある)。前半はアダージョの速度指定どおり、ゆったりと歌われる。後半のアレグロには「急いで、炎のように」と付記されており、噴きあげるような勢いをもつ。中間のいったん静かになる部分では、前半のアダージョの旋律が暗示される。1849年に作曲された。

シューマン：

おとぎの絵本 Op.113

1851年に書かれた、ヴィオラとピアノのための4つの小品。「おとぎの絵本」というタイトルだが、どのような物語でどのような場面であるかは、シューマンは説明していない。ニ短調の**第1曲(急がずに)**では愁いを含んだメロディをヴィオラが歌い、ピアノと対話する。へ長調の**第2曲(生き生きと)**は、駆けまわるような快活さをもつロンド形式の曲。ふたたびニ短調の**第3曲(急いで)**のヴィオラは激情的に音型を刻む。ロ長調の中間部でいったん静まるが、激しい音楽がすぐに再帰する。ニ長調の**第4曲(ゆっくりと、物思いに沈む表情をもって)**は、前の2つの曲の興奮をおさめようとするように、静かに歌われる。

シューベルト：

アヴェ・マリア D839

シューベルトは1825年に、イギリスの詩人ウォルター・スコットの叙事詩『湖上の美人』の、アダム・シュトルクによるドイツ語訳を歌詞として、7曲からなる同名の歌曲集を作曲した。これはその第6曲で、ヒロインのエレンが歌う3番目の歌であることから、「エレンの歌 第3番」と名づけられた。内容は、苦境のエレンが聖母マリアに救いを求めて祈るもので、歌詞の「アヴェ・マリア」がきわめて印象的であることから、一般にはこの呼び名で知られている。

シューベルト：

すみれ D786

歌曲集《美しき水車小屋の娘》と同じ1823年作曲の歌曲で、フランツ・ショーバーの詩による。ショーバーはシューベルトの親しい友人で、名曲「音楽に寄せて(楽に寄す)」もショーバーの詩に作曲されている。演奏時間13～15分という、単独の歌曲ではかなり長大なバラードである。

歌詞の大意は、「マツユキソウよ、草原で君は鳴る」と、白い花で春を招くマツユキソウへの呼びかけに始まる。マツユキソウに続いてスマレも目覚め、艶やかに装って恋人のもとへ急ぐが、先走りすぎて、まだ姉妹も花婿もいない。ひとりぼっちであることに気づいたスマレは、絶望の悲しみから茂みに身を隠してしまう。やがて、他の花々が次々と目覚めて、春を祝う宴を楽しく開く。ところがスマレはそのとき、ひとり寂しく萎れていた。その安息をマツユキソウに祈って終わる、というもの。

原題はラテン語でスマレを意味する「Viola」で、楽器のヴィオラと同じ綴りとなるが、これは偶然の一致で、語源は異なるようだ。ちなみにドイツでは、この楽器のことを一般に「ブラッチェ(Bratsche)」と呼んでいる。

シューベルト：

アルペジオーネ・ソナタ イ短調 D821

いまからちょうど200年前の1824年11月に作曲された、アルペジオーネとピアノのためのソナタである。アルペジオーネはウィーンで発明されたばかりの、6本の弦を弓でひく弦楽器だった。しかし、楽譜がシューベルトの没後に初めて出版された1871年の時点ですでにこの楽器が廃れていたため、音域の近いチェロで演奏することが一般的だが、ヴィオラの名手たちにとっても、同様に大切なレパートリーである。

イ短調の**第1楽章**は**アレグロ・モデラート**、冒頭にピアノがひく愁いを含んだ第1主題と、快活な第2主題によるソナタ形式。ホ長調の**第2楽章**は**アダージョ**で、歌謡性豊かなメロディがゆったりと奏でられる。休止をはさまずにそのまま続けられるイ長調の**第3楽章**は**アレグレット**で、明るく伸びやかなメロディに始まるAパートの反復の合間に、情熱的なBパートと明朗なCパートが挿入され、ABACBAのロンド形式となっている。